

内閣府青年国際交流事業の在り方検討会（第1回）

議事録

内閣府青年国際交流事業の在り方検討会（第1回）

議事次第

令和8年4月17日（金）

10：00～12：00

オンライン開催

1 開会

2 挨拶

内閣府政策統括官（共生・共助担当）

3 構成員挨拶

4 議事

(1) 本検討会について

(2) 内閣府青年国際交流事業の目的・意義等について

(3) 船事業を取り巻く環境の変化を踏まえた事業の在り方について

(4) その他

5 閉会

出席者

（構成員）

南島座長、梅宮構成員、中村構成員、船橋構成員、山本構成員

（内閣府）

水野政策統括官、南大臣官房審議官（青年国際交流担当室長）、牧野参事官、伊藤国際調整官、野木参事官補佐

（オブザーバー）

白木日本青年国際交流機構会長

○野木参事官補佐 皆様、本日はお忙しい中お集まりいただきありがとうございます。

定刻となりましたので、ただいまより第1回内閣府青年国際交流事業の在り方検討会を開催します。

私は内閣府青年国際交流担当室の野木と申します。

議事に入るまでの進行を務めさせていただきます。

本検討会はオンライン（teams）で開催いたします。会議中、カメラはオン、マイクはミュートとし、御発言時のみオンにさせていただきますようお願いいたします。御発言を希望される場合は、挙手ボタンでお知らせください。

また、本会議は記録のため事務局にて録音及び録画を行っております。あらかじめ御承知置きください。構成員、オブザーバー及び傍聴の皆様におかれましては、本会議の録音及び録画はお控えいただきますようお願いいたします。

それでは、初めに政策統括官の水野より御挨拶申し上げます。

○水野統括官 内閣府政策統括官の水野でございます。本日はお忙しい中、内閣府青年国際交流事業の在り方検討会に御出席をいただきまして、誠にありがとうございます。

また、御多忙の中、本検討会構成員への御就任を御快諾いただきましたことにつきまして、重ねて御礼申し上げます。

内閣府青年国際交流事業は、1959年の皇太子殿下の御成婚記念事業に端を発し、これまで長年にわたり次代を担う若者が国境を越えて相互理解を深め、国際的な視野と実践力を培う貴重な機会として実施されてまいりました。

参加された多くの青年が、その後、国際社会や地域社会において幅広く活躍されていることは、本事業の大きな成果であると認識しております。

一方でデジタル化の進展、交流形態や価値観の多様化、青年を取り巻く課題の複雑化など、内閣府青年国際交流事業を取り巻く環境は大きく変化しております。特に本年5月、1990年以降、青年の船交流事業で使用され、交流事業の象徴的存在であった「にっぽん丸」が引退することとなっております。数多くの青年を乗せて世界各国をつなぎ、多くの学びと経験を提供してきたにっぽん丸の引退は一つの時代の節目であると同時に、青年国際交流事業が新たな段階へと移行していく重要な転換点であると考えております。

本事業の意義を検証しつつ、時代に即した形で発展させていくことが求められております。

この検討会は、こうした問題意識をもとに、青年国際交流事業が果たすべき役割や育成すべき人材像を改めて確認しつつ、にっぽん丸引退後の事業の在り方、事業強化のための取組について、幅広く御議論いただくことを目的として開催することとしたものでございます。構成員の皆様には、従来の枠組みにとらわれることなく、それぞれのお立場、御専門の知見を生かした率直かつ建設的な御意見をいただきたいと存じます。

それでは皆様、どうぞよろしくようお願いいたします。

○野木参事官補佐 続いて、本検討会の構成員より自己紹介をいただければと存じます。構成員については、資料1の別紙の記載のとおりであり、座長については南島構成員にお願いさせていただいて

おります。本日はすべての構成員が御出席となっております。それでは五十音順で、梅宮構成員からお願いいたします。

○梅宮構成員 おはようございます。御説明ありがとうございました。上智大学で教員をしております、梅宮と申します。グローバル教育センターという全学部横断的にグローバル教育を推進するセンターに所属して活動しております。比較教育学、国際教育を専門に研究活動等を行っております。お世話になります。どうぞよろしくをお願いいたします。

○中村構成員 私は現在、東京外国語大学の連携教授という肩書きをこの4月からいただきましたが、もともとは国連UNHCR協会という組織に属しておりました。昨年の1月に定年退職いたしました。それ以前は、国連難民高等弁務官事務所の職員でした。学生時代、1982年に第9回の「東南アジア青年の船」事業に参加し、また、国連職員だった時代に休職しまして、第23回の「東南アジア青年の船」事業のナショナルリーダーを務めさせていただきました。前回の令和4年の検討会にも参加させていただいて、今回また新たな局面を迎えるということで、少しでも貢献できたらと思っております。どうぞよろしくをお願いいたします。

○南島構成員 皆様、おはようございます。龍谷大学の南島和久と申します。前回、国際青年国際交流の在り方の検討会を数年前にやったことがありますけれども、その時も座長をやらせていただいております。今回もどうぞよろしくお申し上げます。専門は行政学、公共政策学でございます。

○船橋構成員 おはようございます。船橋と申します。長年、国際交流、教育、人材育成に関わってきました。直近のこの10年間は「トビタテ！留学JAPAN」という文部科学省発の官民共同事業を立ち上げて、実施しています。それ以外に「さとのぼ大学」という、日本の地域を一年ずつ移住する、国内の留学のようなことをやっております。よろしくお祈りします。

○山本構成員 おはようございます。山本万優と申します。よろしくお祈りします。私は「世界青年の船」事業出身の者で、2016年に大学生の時に参加をして、その後全日本空輸に入社をしまして、リクルートに転職をし、スタディサプリという教育事業部におりました。現在は女性のキャリア支援をする会社を立ち上げて運営をしております。よろしくお祈りします。

○野木参事官補佐 本検討会には、内閣府青年国際交流事業の同窓会組織である日本青年国際交流機構、IYEOの白木会長にオブザーバーとして御参加をいただいております。白木オブザーバーから一言お願いできますでしょうか。

○白木オブザーバー 皆様、おはようございます。日本青年国際交流機構、IYEOという団体の会長を務めております白木と申します。内閣府の青年国際交流事業には2005年に第18回の世界青年の船事業の参加青年として参加をさせていただいたことを皮切りに、日本・韓国青年親善交流事業、国際社会青年育成事業、世界青年の船のサブナショナルリーダーなど、参加青年から、参加青年たちを支えるリーダー役の方もさせていただきながら、20年近く事後活動組織という、事業で得た経験や繋がりを活かし、どう地域社会や国際社会の中で貢献していこうかと、OB団体で活動をさせていただきました。

20年間、いろいろな変遷を内閣府事業とともに見てきた立場からも、オブザーバーとして、内閣府事業をよりよくできないかなと思っております。

○野木参事官補佐 皆様ありがとうございました。内閣府からは、政策統括官の水野、大臣官房審議官・青年国際交流担当室長の南、参事官の牧野、国際調整官の伊藤が出席しております。また、各関係省庁の皆様にも傍聴していただきます。

議事に入る前に、本検討会の扱いについて、資料1を基に説明させていただきます。

まず、本検討会は、内閣府政策統括官（共生・共助担当）の決定により開催するものです。検討会で配布された資料は検討会終了後、速やかに内閣府ウェブサイトに掲載しますが、座長が必要と認めた場合、全部または一部を非公開とすることができることとなっております。

また、検討会終了後、議事録を作成し、内閣府ウェブサイトに掲載しますが、議事録については、座長が必要と認めた場合、全部または一部を非公開とすることができることとなっております。議事録の全部または一部を非公開とする場合には、当該部分について議事要旨を作成し、内閣府ウェブサイトに掲載することとなっております。

それでは、この後は南島座長に議事の進行をお願いしたいと存じます。南島座長、よろしくお願いたします。

○南島座長 改めまして、南島でございます。僭越ながら座長をやらせていただきます。どうぞよろしくお願いたします。

ここでの議論は、先ほど御説明いただきましたが、内閣府政策統括官決定により開催されるということですので、政策統括官が政策について意思決定をされる際に、参考となるような議論の整理ができればと考えております。どうぞよろしくお願いたします。

それでは、早速議事に入ります。本検討会について、事務局よりまずは御説明をお願いしたいと思います。

○牧野参事官 本検討会について、資料を画面で共有させていただきながら説明させていただきます。

はじめに、内閣府青年国際交流事業の概要について簡単に御説明させていただきます。

資料2-1の内閣府青年国際交流事業について、目的としては、日本青年を国際社会及び地域社会で活躍する次世代グローバルリーダーとして育成することとしております。いずれも主な対象としては、18歳から30歳までということでございます。

現在、航空機を用いる事業として、国際社会青年育成事業、日本・中国青年親善交流事業、日本・韓国青年親善交流事業の3事業がありまして、船舶を用いる事業として、「東南アジア青年の船」事業、「世界青年の船」事業の2事業を実施しております。

事業に参加して終わりということではなくて、参加した後も長期にわたり、人的ネットワークを維持発展していくという点に特色があると考えております。

これまで、日本参加青年については1万8千人、外国参加青年については2万3千人が参加しており、国際的に大規模な人的なネットワークが形成されてきております。

先ほど白木会長から御挨拶がありましたけれども、日本では日本青年国際交流機構（IYEO）が組織されており、また、海外ではASEAN各国あるいは世界各国に同窓会組織が設立されております。それぞれ社会貢献活動あるいは国際交流活動などに取り組んでおります。各分野での活躍するOBを国内外

で多数輩出していると考えております。

他方、冒頭の統括官からの挨拶にありましたが、内閣府青年国際交流事業、特に青年の船交流事業を取り巻く環境は大きく変化していると考えております。資料2-2を御覧いただければと思います。

挨拶でもありましたが、長年使用してきましたにっぽん丸という船舶が本年5月に運航を終了する予定となっております。

世界的にクルーズ船が大型化してきているという事情があり、クルーズ船を利用して事業を実施する場合、従来のにっぽん丸と比べて、船が大型化するというに伴って、備船に要する費用も大幅に上昇する見込みとなっております。

にっぽん丸を使用していた時代ですけれども、コロナ前は1日当たりおおむね1,000万円程度が備船に関する費用としてかかっていたものが、コロナ後は1500万円を超えるような状況となっております。

令和8年度予算において、今後、船を競争入札で決めるところ、備船費用についてはにっぽん丸ではない別の船を使用することを前提に、1日当たり、令和7年度の倍となる3,000万円を超える予算を計上します。

このような状況から、これまでと同様のやり方で、同一の年度内に2つの船に関する事業を実施するという事は困難な状況となっております。当面の方針としては、ここに書いてありますけれども、令和8年度については、「東南アジア青年の船」事業を実施し、令和9年度については、「世界青年の船」事業を実施するという事にしております。

従来の同様のやり方で事業を安定的、継続的に実施するという事は、非常に難しい状況になっていると考えておまして、事業の在り方を改めて考え直すということが必要な時期に差し掛かっていると考えております。

冒頭、統括官からもありましたが、本検討会は、このような状況を踏まえて、内閣府青年交流事業の在り方について改めて考えるために開催させていただいたものです。従来の前提をそのまま置いた議論ではなくて、何を守り、何を見直すべきかという観点から忌憚のない御意見をいただくということを想定しております。

最後に、本検討会で扱う主な論点と検討の進め方について、資料の2-3で説明させていただきます。

本検討会は、おおむね1か月に1度、合計4回の開催を予定しております。第1回の本日は、内閣府青年国際交流事業の目的・意義、あるいは育成すべき人材像について確認したいと思っております。

その上で、主に第2回で、船事業を取り巻く環境の変化を踏まえた事業の在り方について、検討・整理していただければと思っております。そして、第3回でさらなる事業強化に向けた取組について御議論いただくことを考えております。

検討していただいた結果については、最終的には夏ごろに取りまとめることができると考えております。

事務局からの説明は以上となります。

○南島座長 ありがとうございます。事業の概要と主な論点・検討の進め方について御説明をいただきましたが、この時点で、確認しておくべき点、御質問があればお願いしたいと思いますが、いかがでしょうか。

よろしいでしょうか。また疑問点が出てきた時に、御発言いただければと思います。それでは、先に進めてまいります。続きまして、内閣府青年国際交流事業の目的・意義等について、事務局より御説明をお願いいたします。

○牧野参事官 続きまして、内閣府青年国際交流事業の目的・意義等について御説明させていただきます。冒頭、南島座長からもありましたが、令和4年に開催された青年国際交流事業の在り方検討会について御説明させていただきます。

令和4年の検討会は、コロナ禍で国際交流事業が一時中断した期間を経て、交流事業を再開するにあたり、令和の時代にふさわしい青年国際交流事業の在り方について検討するために開催されたものと考えております。

報告書では、内閣府青年国際交流事業の目的あるいは特色を整理した上で、今後育成すべき人材像を提示し、そのような人材を育成するための事業強化のための取組が整理されております。

今回の検討会におきましても、先ほど申し上げたとおり、事業の目的・意義あるいは、人材像を整理した上で、事業の在り方について御検討いただくことを考えております。

この事業の目的・意義等の検討に当たりましては、令和4年の検討会の議論を踏まえながら、構成員それぞれのお立場から議論いただければと思っております。

論点の御説明をさせていただきます。資料3になります。

令和4年の検討会では、①青年の国際的視野を広げ、国際協調の精神やリーダーシップを持った青年を育成すること、②事後活動として、青年の社会貢献活動を促進すること、③国境を越えた青年相互の友好と理解を促進し、長期にわたる緊密な人的つながりを形成すること、この3つの柱によりまして、国際社会・地域社会で活躍する次世代グローバルリーダーを育成することを事業の目的として整理しております。

今回の検討会におきましては、令和4年の議論をベースにしなが、見直すべき事項等について御意見をいただければと思っております。特に、本事業におきましては、民間や地方公共団体ではなく、国、内閣府という行政機関が実施しているという点に、他の事業にはない特徴があると思っております。

令和4年の検討会におきましては、各国の政府と連携して、政府要人あるいは政府首脳との表敬の機会を設けられること、あるいは各国間で大規模な青年国際交流を実施できるということは、国の事業だからこそ可能な点とされております。

また、国の事業として各国を巻き込むからこそ、各国が選抜してきた優秀な参加青年を確保できているということもあると考えております。

特に、国が実施する青年国際交流事業として、今後も維持発展すべき価値とは何か、あるいは見直しが必要な点はどこかという観点から、国として行う意義などについて御議論いただければと思っております。

おります。

さらに、育成すべき人材像について説明させていただきます。令和4年の検討会では、育成すべき人材像につきまして、5点で整理されております。①未来志向（Future）、②国際・地域感覚（Glocality）、③多様性（Diversity）、④コラボレーション（Collaboration）及び⑤社会貢献（Contribution）となっております。令和4年の検討会では、この5つを兼ね備えた人材というのが、次世代グローバルリーダーとして必要だろうということで、このような人材の育成を目指すためのプログラムを考えるべきとされております。

今回の検討会では、令和4年の検討会の議論をベースにしながら、育成すべき人材像の要素、あるいは、グローバルリーダーとして必要な素養・スキルに関し、見直すべき事項等について御意見をいただければと思います。

例えば、AIが進展した、国際情勢が不安定化している、そのように社会環境が大きく変化している中で、グローバルリーダーはどのような素養あるいはスキルを持つべきか、さらに、強調・具体化すべき観点などについて、構成員から幅広い御意見をいただければと思っております。

今回の検討会におきましては、本日の第1回の会議で事業の目的・意義、人材像に関する議論を行っていただくことを予定しております。ただし、必ずしもここで明確に何か結論を出すということではなくて、構成員の皆様それぞれのお立場から幅広い御意見をいただき、意見交換を行うことを通じて、今後の検討会における検討の方向性、共通認識を持てればと考えております。事務局からの説明は以上になります。

○南島座長 ありがとうございます。令和4年の検討会について御紹介いただきましたが、私も座長として参画をしておりましたので、補足の説明を少し申し上げたいと思います。

これまで内閣府では、民主党の連立政権の2012年に遡りますが「事業仕分け」がございまして、それ以来、事業の評価について、どう説明するのかということで、繰り返し検討会が重ねられておりました。その中で、グローバル人材の面に焦点が当たって議論されてきたということがありましたが、令和4年の検討会では、環境がいろいろ変わってきたというところで、前提をいくつか置いた上で議論していったということがありました。

4点ほどありまして、1点目が、平成の時代が終わり新たな元号がスタートした、これを踏まえて、皇室ゆかりの事業としていただいていることもありますので、ここで1回きちっと見直しをしておきたいというお話がございました。2つ目に、こちらがより大きいお話ですけれども、コロナ禍が当時あり、船事業そのものを、感染症リスクを踏まえた形で見直した方がいいのではないかというお話がございました。これが2点目でございます。3点目に、オンライン化です。コロナ禍で、日本全国オンライン化が進みました。オンライン化がとにかく進んでインターネットメディアの活用が進んだ。これをもっと活用できないか。例えば、ユーチューブにいろいろ情報を上げていくということなど、大きな社会環境の変化としてありました。4点目に、政府全体で2017年からだんだんと年を追うごとに大きくなっていった一つの流れが、EBPMです。証拠に基づく政策立案が加速化してきたということがありました。こういった変化を踏まえて、令和の時代にふさわしい事業の在り方を考えようと議論

してきたということであります。先ほど、事務局から御説明いただきました。参考資料1の方を見ていただければと思いますけれども、育成すべき人材像と、それから3つの局面というのを書いております。育成すべき青年の人材像は、これまで蓄積されてきた議論を集約したものになっていると思います。

これが新しく打ち出したものでありまして、事業のフローに沿って、「募集選考段階」「事業実施段階」「事後活動段階」の3つの局面を置きまして、この中でより事業を強化すべきところはどこか、それは事業のPRにもなるだろうと。あるいは、評価という面でも、この強化すべきポイントが大事なのではないかということで、新しく打ち出したという特徴があります。

特に「募集選考段階」。これは倍率が高ければ高いほど優秀な方が集まっていただけということですし、広報を強化するということが大事だということで、意欲の高い青年の参加を募るとい募集選考段階は、強化の余地があるのではないかと。

2つ目の「事業実施段階」では、効果的なプログラムを実施すると書いていますけれども、このプログラムに関しては、非常に参加者の満足感も高いところですので微調整ということではいいのではないかとということでした。

最後の「事後活動段階」は、このグローバルネットワークを生かして事後活動を継続する、あるいはこれを「見える化」というところについては、まだいろいろ課題ですとか、取り組むべきポイントもあるのではないかと。「課題」というのは「伸びしろ」と言い換えることもできますので、そういうところを伸ばしていくことが一つの評価の視点としては大事なのではないかと、こういう整理をさせていただいたということであります。

併せてプログラムそのものも、魅力向上に向けていろいろと再調整をしていただいて、令和の新たなプログラムということで、報告書の看板にさせていただいたと、そういう内容でございます。少し長くなりましたが、私からの補足は以上でございます。何か御質問、確認したいことなどございますでしょうか。

○船橋構成員 前提として、この事業は本当に素晴らしいと思っています。この事業にしかできないことがありますし、ここでしか育てられない人材、さらには他国のリーダーとの関係構築には、大きな価値があると感じています。

そのうえで、私が今回選ばれたのは、おそらく「トビタテ！留学JAPAN」という、また別の枠組みの中で、税金にできるだけ依存せずにごう実現していくか、という観点もあるのではないかと考えています。いずれにしても、私はこの事業を強く応援しているという前提で、お話しします。今回、人材に関する議論が中心になるとしますので、具体論は別途お話しできればと思います。人材像そのものについては、これからのAI時代を見据えた方向性として、現時点の整理で大きくはよいと思っています。

ただ、もう一段深める余地はあると感じています。

トビタテの場合は、「何人を、どのようなペルソナで、どのようなグローバル・リーダーとして育てるのか」というところまで、かなり具体的に設計してきました。例えば、ダボス会議のヤング・グロ

ーバル・リーダーズやグローバル・シェイパーズに相当する人材、国会議員、研究者、学会で成果を上げる人材、あるいは起業家を何人輩出するか、といったところまでイメージしていました。

また、我々の事業では、世界トップレベル大学コース、新興国コース、STEAMコースなど、ポートフォリオ全体を見据えてコース設計も行ってきました。我々は18歳から20歳の高校生・大学生が中心でしたが、今回のように18歳から30歳を対象にできるのであれば、もっと幅広くどんな職種、立場の参加者を求めるのか等を設計できるはずと考えます。人材像そのものは、ある意味では抽象的で、本質的には大きく変わらないと思います。だからこそ、「最終的にどこを目指すのか」という到達点を、もう少し具体的に設計したほうがよいのではないかと思います。

トビタテはこれまでの開始10年で約13,000人を輩出しており、皆さんの約10,000人という規模感と近いのですが、一例として、すでに30歳前半で国会議員になった者が2人輩出、地方での教育長も輩出、起業家は500人規模で生まれたり、具体的な成果が見えてきています。ですので、人材像をもう少し具体的なレベルまで落とし込むことを、1つの論点としてご提案したいと思います。

○南島座長 ありがとうございます。船橋構成員、せっかくですので、トビタテの事業について、大枠で結構ですが、どういう特徴を持っているのか、どういう魅力があるのかというところを、PRも兼ねて教えていただいてもよろしいでしょうか。

○船橋構成員 分かりました。簡潔にご説明します。「トビタテ！留学JAPAN」は2014年にスタートした、文部科学省発の官民協働による国家プロジェクトです。ただし、文部科学省のブランドと場所をお借りしつつも、基本的な事業費は寄附で賄うという設計で進めてきました。この10年間で、260社から総額165億円の寄附を集めています。もっとも、完全に民間資金だけというわけではなく、年間約6,000万円の広告宣伝費については公的支援を受けていますし、文部科学省や日本学生支援機構の職員にも事務面で参画しています。一方で、100人を超える企業からの出向者を、ほぼ“手弁当”で集めて事務局をつくってきたことも、この事業の大きな特徴です。対象は30歳未満の高校生・大学生・大学院生で、高校生は2週間から1年程度、大学生は3か月から1年程度の留学が中心です。特徴は、用意された留学先に行くのではなく、本人が自ら計画を立て、行きたい場所で、やりたいことに挑戦するという点にあります。そのため、返還不要の奨学金を月額で支給する仕組みをとっています。これまでに延べ13,000人が留学し、渡航先は125か国に広がっています。私が皆さんの事業との関係で申し上げたいのは、ここには非常に良い住み分けの可能性があるということです。というのも、今の地政学的な状況では、どうしても留学先が欧米・北米に集中しがちです。以前はアジア向けのコースを設け、アジアが3割程度、アフリカにも何百人と送り出していましたが、今は難しくなっています。

その一方で、「青年の船」のような交流事業であれば、対象国を戦略的に選ぶことができます。

つまり、今こそ、国と国との関係性を意図的につくれる事業として、大きな価値があるのではないかと思います。また、私自身の実感として、留学だけでは人は育ち切らないと思っています。

だからこそ、トビタテはアルムナイを全国9支部で組織化し、かつ複数の企業なNPO等と連携し、起

業家育成のゼミや、グローバルリーダーを目指した者向けのワークショップや国際会議に参加するための支援等、多方向の支援を行っています。私自身、ダボス会議の「ヤング・グローバル・リーダー」のコミュニティに参加していますが、そこから学んだのは、ロールモデルに出会えること、志の高い仲間と継続的につながれることが、人材育成において極めて重要だということです。その意味で、留学という“単発の経験”だけではなく、その後のコミュニティ形成まで含めて設計することが、本質的な人材育成には欠かせないと考えています。

○南島座長 ありがとうございます。今、船橋構成員から御紹介いただきましたが、大変評判のいいトビタテの事業です。参加している学生も、私も何人か知っておりますけれども、学生の評判も良いということで、非常に素晴らしい事業だなと思っています。

○船橋構成員 トビタテ事業では非常多くの青年の船のアルムナイの方々に関わって頂いています。特に留学前の事前事後研修の講師、トビタテ事務局員にも多く存在します。本当に本事業のおかげで成り立っていて感謝しています。従い、アルムナイの皆さんとの接点の中から、本事業への熱意も非常に強く伝わってきますし、また事業の課題もうかがっています。それに対して、私自身の経験からこうやれば良いというアイデアはありますので、いろいろとお話させてください。

○南島座長 是非また知見を共有させていただければと思っていますので、引き続きよろしくお願ひいたします。ここで確認しておきたいことは、他にございますでしょうか。よろしいですか。それでは、論点を出していただいておりますけれども、内閣府青年国際交流事業の目的・意義と、それから人材像。この2つが、まずは最初の論点ということになります。1つ目の論点、内閣青年国際交流事業の目的・意義について、御発言をお願いしたいなというふうに思っておりますけれども、これは山本構成員、中村構成員から御発言いただいたほうがいいかなと思いますが、御経験上、こんなに意義がある、こういう良いところがありますよということがあれば、是非ここで伺いたいなと思っておりますがいかがでしょうか。中村構成員の方から、一旦御発言をいただいてもよろしいでしょうか。

○中村構成員 わかりました。やはり長く続いているプログラムということで、私の知り合いで、国連職員にその後なった方が第1回の参加者で、数年前に第1回の東南アジア青年の船の同窓会をインドネシアで行うという話を聞いたり、私が参加した第9回、第23回でも、個人的なつながりでお互いに行き来していたり、すごいことをしているわけでもなくとも、そこにしっかりした人間関係ができて、家族ぐるみの付き合いをしているとか、そういう仲間が結構いるという事実があります。それはやはり、青年の船に参加したというベースがあって、人間関係が培われてきている。それは、地域の安定とか、今後何かあった時に、そういったベースになる人間関係が支えになるのではないかなということを感じるので、さすがに「東南アジア青年の船」事業も50年もやっていると世代を超えて、こういった人間関係が培われてきているということを感じます。なので、何とかして形を変えながらも、今後も継続していくことが、人材育成だけではなくて、いわゆる地域の安定とか、世界のネットワーク作り、やはり何か有事の時にそういった人間関係が大きな救いになるということ、助けになるということが多々ありますので、そのためにも、こういった地道な事業というのはとても大切だと感じてお

ります。

○南島座長 はい。ありがとうございます。続きまして、山本構成員、もし良ければここで御発言をいただければと思いますが、御経験の上で、どういう意義があったとお考えになっているか。

○山本構成員 はい、ありがとうございます。私も中村構成員のおっしゃるとおりだなというところを感じていますが、1点追加するところがあるとしたら、やっぱりこのグローバルリーダー、国際協調、世界平和みたいな単語が、大学とかで学んでいるものではなくて、フェイストゥフェイスで12か国の人が一同に会するというのは多分人生でもあるかないか、もしくは最初の経験になってくる青年が多いと思っています。

私の経験から1つ、今でも心に残っていることとしては、やっぱりそういう言葉が言葉で終わることなく、ニュースの先にいる友人の顔だったり、このプログラムで出会った人の顔だったりというのが思い浮かべられるほどの密な関係性というのも、船の中で構築できるので、今後の事業、私の場合だと起業してどうしようかだったりとか、もしくは次のキャリアにステップが上がっていく時に、どういうふうにやっていきたいかというところが、実際に情景が浮かぶような家族のような存在ができてきますので、そこがすごく今でも役に立っていると思います。

実際、私は今卒業生として10年経っているところなので、同期のほとんどが社会人になっているところ、社会人になってそれぞれ大企業だったり議員だったり、NGOだったりいろんなところに散らばっていますが、それでも10年経って次の40代50代みたいなところで、一緒にこういうことができなかってNGOを考えたりですとか、同じテーマを持っている人たちで関係性を持って団体を作っていこうみたいなことが今でも行われているので、やっぱりそういう意義がこのプログラムの中にあるのかなというふうに思っています。

○南島座長 ありがとうございます。そうしましたら、ここで「世界青年の船」事業出身ということで、オブザーバーですけども、白木オブザーバーも、もし御発言いただければ、御経験からいろいろお考えになっていることもあるでしょうし、会長職のお立場からお考えになっていることもあるかと思いますが、御意見をお伺いできればと思いますが、御発言いただけますでしょうか。

○白木オブザーバー 私自身は航空機事業と船事業両方に参加をした経験がありますが、今回、船事業で言いますと、やはり海外青年たちと同じ共通体験を、深く原体験としてできるということが、やはりこの事業の特色だなと思っています。私自身は船橋構成員からありましたように、どちらかというと、企業、専門職ですとか、テーマ別に、もっと事後活動を推進したいと考えてはいるけれども、どちらかというと18歳から参加する、まだ専門性や現場経験のない青年たちも多く含まれている中、グローバルリーダーたちのIPS細胞みたいなものなのではないかなというふうには思っていて、まだ損得関係とか、もしくは利害関係を超えて、本当に人間としてフェイストゥフェイスで、感動であったり、もしくはお互いの国や、個人を深く知り合う中に、いろんな衝突も含めてできる人間関係が、船の中の例えば1か月とか、そういうある程度の期間まとまって共同生活する中で、いいことだけではない、難しいこと、もしくは人間として、ちょっと相入れないようなことも含めて、ぶつかり合うみたいな生活がそこにあるというところは、単なるプログラムとしての訪問やフィールドワー

クを超えて、人間同士が本当にぶつかった先に、違いを超えて何を共に交流から生み出すかということの価値を考えるということは、一番最初の出発点になるのではないかなとは思っています。ただ一方で、出発点だけで、このプログラムの中に突っ込まれた後に、皆さんそれぞれの世界にまた散っていった先に、やはりどうしてももう船でしか会ったことのないメンバーもたくさんいますし、20年経って今どこにいるのかなと思っている青年たちもいるということは、その見える化と実践的な活用の受皿がまだ用意できてないとも、我々事後活動組織のIYEOとしては考えていまして、今後は、世界の中でどうやって活躍するかということ、テーマ別にも、世界のビジョン別にも、受皿を作っていくみたいなのが、事後活動組織の可能性としてもあるのではないかと、これを普段考えております。船の意義と、それから事後活動組織の会長の立場で、併せて発言をさせていただきました。ありがとうございます。

○南島座長 ありがとうございます。梅宮構成員、最後になります。今までの御発言とか、御説明なんかをお聞きになってコメントでも所感でも結構ですけれども、一言いただければと思いますが、いかがでしょうか。

○梅宮構成員 ありがとうございます。前回の検討会の内容も御説明いただいて、また、実際に事業に参加された皆様からのお話も伺って、大変勉強になり、参考になりました。皆さんおっしゃったところに賛同しつつですが、特に中村構成員がおっしゃったように、仮に細くても事業を続けるというのは非常に大事な点だと感じております。一度途切れると、途切れたものをまた取り戻すにはすごく労力と時間がかかってしまうと思うので、世代を超えたネットワークというお話もありましたが、それをいかに繋げていくのかというところは非常に大事な点なのかなと思いつつ伺ったところです。

論点として挙げていただいた点に関して、少しだけ触れさせていただくと、冒頭、内閣府という国の行政機関が事業を行うことの意義は何なのかという論点を挙げてくださったと思います。これも私は令和4年の検討会の報告書で書いてくださっている内容がよくまとまっていると思いつつ、大学で仕事している立場から見ても、まず1つが、資金的なリソースの規模で、他の団体では代替できない大きな規模で事業を行えるというのは魅力だと思います。同時に、資金的な点だけではなく、国内や海外のリソースにアクセスができモービライズ（動員）できるというのが非常に大きなポイントではないかと思いつつ、この場合のリソースは必ずしも資金的なものだけではなくて、人的なリソースや制度的なリソースなども含めてです。共有いただいた令和6年度の「世界青年の船」事業の報告書を拝見した時にも、島根県での地域実践活動において、コースディスカッションのテーマとリンクさせながら、そこで設定された社会課題に関連した訪問先を設定してグループに分かれて訪問されています。大学の立場からすると、なかなかこういったアレンジはやりたくても簡単にできるものではなく、内閣府だからこそこのプログラム構成と言えます。こういったプログラムに参加できる学生さんや皆さんは大変幸運ではないかと思いつつ見ていたところです。地方自治体、それからそこを通じて、各地の団体とか企業にアクセスができる、協力を得られるということ自体に強みがあると思いつつ拝見したところです。

私に関わっているグローバル教育について1つ例を挙げると、昨年夏にアジア8か国から学生40人

ぐらいの方に東京に集まっていたいて、グローバルリーダーシップの育成のための1週間の合宿プログラムを行いました。持続可能な開発のための教育（ESD）をテーマに、埼玉の中学校を訪問したり、神奈川にある外国のルーツを持った子供たちの教育を支援している団体のところを訪問したりと、関係者の協力を得ながらプログラムを組みましたが、アクセス可能なリソースには限りがあるのも実情です。それとの比較においても、内閣府さんが行われているこの事業の規模、リソースへのアクセスの強みというのはとても強いものがあるなと思って拝見をしました。感想めいたことですが、私の方からは以上になります。

○南島座長 ありがとうございます。内閣府の事業の意義として重要な点を御指摘いただいたとおっております。

○船橋構成員 率直に申し上げますと、事業の存続に危機感があるからこそ、今回のような議論の場が設けられているのだと理解しています。私は、この事業はぜひ残すべきだと思っています。特に、船上で一定期間を共に過ごすことで生まれる関係性には、他では代替できない価値があります。したがって、これを単なる陸上での短期研修に置き換えてしまうのであれば、この事業の本質は大きく損なわれると思います。その前提で申し上げますと、だからこそ、今あらためて問うべきなのは、この事業の目的は何かという点だと思います。これは国際交流事業なのか、人材育成事業なのか。もちろん両方ではありますが、どちらを中核に据えるのかを明確にしない限り、今後の説明責任を果たしにくいのではないのでしょうか。もし人材育成を前面に出すのであれば、他の人材育成事業との比較は避けられません。特に、「トビタテ！」のように寄附を活用して実施している事業がある中で、必ず比較されると思います。そうすると、「参加者にとっては素晴らしい経験だった」というだけでは、年十数億円の予算を正当化しにくいのではないかと思います。また、国際交流を掲げるのであれば、選抜される参加者の水準も問われます。草の根交流はもちろん重要ですが、この予算規模に見合うのであれば、海外の参加者と比較しても、政治家、官僚、あるいはそれに準ずるリーダー層など、より戦略的に人材を集める必要があるのではないかと思います。その意味で、1つの方向性として、中村構成員がおっしゃったように、アジアの安定や平和維持への貢献を、事業の中核目的として位置づけることは非常に有効ではないかと思います。年間十数億円で平和や安定への投資ができるのであれば、それはむしろ安いとすら言えるかもしれません。私は、人材育成に寄せすぎると、この事業は不利になると考えています。むしろ、日本が主導して、アジアの平和・信頼醸成の基盤をつくる事業として再定義したほうが、社会的にも財政的にも支持を得やすいのではないのでしょうか。加えて、これだけ多くの外国人参加者がいるのであれば、一定の費用負担をお願いすることも含めて、コストを下げながら価値を高める設計に踏み込むべきだと思います。そのくらいの切迫感を持って議論しないと、4回議論して「良い議論でした」で終わり、最後に本当にどうするのか、というところで立ち行かなくなるのではないかと危惧しています。日本が主導しつつ、他国にも費用を負担してもらいながら、共に平和をつくる事業として再設計する。そうした見せ方そのものの転換も必要ではないかと思います。門外漢ゆえに見えていない部分もあると思いますが、率直に申し上げました。ただ、繰り返しになりますが、私はこの事業は本当に残すべきだと思っています。その前提での提案です。

○南島座長 ありがとうございます。極めて重要な点を今御指摘いただいたかなと思いますので、せっかくだので、船橋構成員のコメントに乗っかりまして、他の方々にも御発言いただければと思いますが、大きく頷いていただいていた中村構成員、いかがでしょうか。

○中村構成員 実は、令和4年の時も私はその視点から発言しようとしたのですが、主流になりませんでした。今回、船橋構成員が本当にそうだと思うようなことを言ってくださった。私が参加した頃の「東南アジア青年の船」事業では、例えば、フィリピン人の青年から、自分のおじいさんは日本兵に殺されたと言われたという参加青年もいました。その頃はまだそんな時代でしたが、その後、幸い、こうやって東南アジアとはすごく良い関係を築いてこられた。おそらく「世界青年の船」事業も同じような役割を果たしていると思う。実は、こういった若い時代からの人間関係というのが、地盤として平和を支えていると思います。特に国連職員として、紛争とか難民のことを仕事にしてきた私にとっては、若い時代のこういう人間関係というのが、いかに平和の基盤になっているかということ強く感じます。そのために、「東南アジア青年の船」事業は、人材育成にもなっているが、実は、平和の役割がものすごく大きいということを感じています。なので、船橋構成員がおっしゃるように、この部分を大きく前面に出してもいいのではないかということには、とても賛成しています。

○南島座長 ありがとうございます。船橋構成員がおっしゃっていたのは、トビタテと比較されると人材育成では負けるという、非常に痛いところを突いていただいております。山本構成員、いかがでしょうか。

○山本構成員 ありがとうございます。おっしゃってくださっているとおり、私はトビタテ！留学JAPANでも面接官をさせていただいたことがあったり、友達もたくさんいて、アルムナイにほぼ入っているような立場なので、両方の事業になんとか関係を持って理解しているつもりですが、この「世界青年の船」事業の私の代の内訳で言うと、1割が社会人で、もう会社員として勤めている方だったり、国会の中で勤めている議員だったりがいらっしゃって、8割から9割は学生という内訳で、日本参加青年だけでいうと、学生のまだ何になるか分からない状態の人たちが出会うことによって、今後のキャリア育成につながっていくというところがありました。

ただ、外国参加青年の内訳で言うと、半分以上は社会人の方だったりとか、もうキャリアを描いている人たちなので、どちらかというとお姉さん、お兄さんのような、立場としては本当にプロフェッショナルを持った方々がいらっしゃって、日本人側がすごくそれに圧倒されるみたいなこともあった。そこでいうと、国際交流に重きを置くのであれば、お互いが同じような専門性の中でどういうふうに世界平和を構築できるかという分野別で議論を深めるというのもできるかと思います。

外国側の派遣されてきた人材像と日本側の人材像は違いがあったので、本当に国際交流とか世界平和を築くためという意味であれば、そこの採用ポイントでも共通認識を持てるとより密にできるのではないかなと思いました。

○南島座長 ありがとうございます。こういう言い方が適切かどうか分かりませんが、後で梅宮構成員にもお話しいただければと思いますが、学生が、昔はなかなか海外に出て行かなかった。でも、時代の流れとともに、いろんな大学が国際交流協定を結んで、外国にどんどん学生が出ていくように今

ではなっているのです、学生にいつまでも募集の軸足を置いていくというわけにもいかないというのは、御提起のとおりかと思えます。問題は、社会人をどうやって獲得していくのか、募集してもらうのかというところに関係しますが、この辺りは白木オブザーバーが、いろいろと思いを悩まれているところとも重なるのかなと思えますが、船橋構成員の御提起に対しまして、もしなにか感じることはありません、御発言お願いしたいと思います。

○白木オブザーバー トビタテ留学JAPANの皆様、我々の会員の中にも多数いて、一緒に取り組みをしたり、アルムナイ同士の交流というのは活発であると私も認識しています。

また、あとJICAの青年海外協力隊員のOB・OGもたくさんいますので、私としては人材育成においては、ステップなのかと思っています。国際交流なのか人材育成なのかというと、船事業に関しては国際交流要素の方が強く、そこを希望する青年たちが来るというイメージがありまして、まず、海外とは何かとか、多文化と触れる。多文化と衝突しながらそこで、まずどういうふうに取り込んでいくのか、文化紹介とかも含めて、例えば、人材育成は、青年たちはそんなに認識していないのだと思っています。もちろん、自分たちは日本代表青年であるとか、育成される存在であるということの認識は強いと思うけれども、まずは国際交流というのが、船の一番の要素だというふうには、現場を見て感じる場所です。

船橋構成員の御指摘があった通り、私としては民間外交であり、予防外交でもあるというふうに思っています、予防・民間外交みたいなものの価値を、じゃあどういうふうに見える化するのか、定量化するののかということについては、非常に今思い悩んでいます。言ってしまうと、10年、20年経った青年たちが世界中にいても、実は内閣府事業の出身ですということ、余り皆さん明示されない。何者でもなかった時に、高校、大学生の時に参加したみたいなことが、蓋を開けてみると実は船のメンバーでしたということがある。明示された目的に対してあなた方は参加していると言っていないがゆえに、結果として船の参加青年たちがいろんなところにはいるけれど、かえって10年後、20年後にこのつながりが、じゃあ我々はどういうふうの世界平和に貢献してきただろうか、ということを確認する時期には来ているのではないかなと思えます。

言い換えれば、国際交流要素でいえば、「世界青年の船」事業は年に1回、グローバルアッセンブリーという形で同窓会として集まるということをやっています、前はエジプト、今回はメキシコですけれども、だいたい10分ぐらいで300人から400人ぐらいの皆さんが応募に殺到してきます。青年たちはやっぱり事後の交流とかにも重きを置いて、世代を超えて世界を超えて繋がりたいという求心力があるというのは、この我々の同窓会を、年に1回世界で開催しているというところでも見られるのかなとは思っていました。

○南島座長 ありがとうございます。確かに御指摘のとおり、当事者の学生は、人材育成される側は、「人材育成が目的だ」と思って参加しているわけではないというのは、目から鱗でございました。梅宮構成員、船橋構成員が御提起いただきました、目的が人材育成だとトビタテと比較されるということでしたけれども、大学の中でも沢山国際交流事業を手掛けられているかなと思えますが、その立場から、船橋構成員のコメントに関して、御所見等ございましたら、お願いしたいと思います。

○梅宮構成員 まず、船橋構成員がおっしゃったとおり、何のために、国際的な視野や国際的な感覚を持ち、他の国や社会の中心になっていくような人たちとのネットワークを強く持ったグローバルリーダーを育成するののかということに関しては、やはりその先に、国際的に相互の理解を進めることによってより安定的な地域や世界を実現していくという大きな目的を目指している点について賛同します。

そのうえで、この事業の中で行うことが、国際交流なのか、人材育成なのかという点は切り分けてしまうことができないところもあり、両方を行うことでグローバルリーダーが育ち、かつ、この事業が目指している互いの理解が進むことになると思います。もしかしたら、2つ目の論点の「育成すべき人材像」として描く人材がどういうコンピテンシーを持っていくのかとも関わってくるのかもしれませんが、国際的な視野を持つ人材、コミュニケーション力や他者を思いやる力を持ち違いを受け入れる力をもった人材を育成することを考えると、まさにそういう力をつけるための人材育成の要素を持った事業として前に進んでいくことになると思います。従って、目標のレベルをどこに置いて議論するのかによっても論点が変わってくるので、より上位の目標を検討しながらそのために必要なコンピテンシーも議論していくことができればと思います。

○南島座長 ありがとうございます。御指摘のとおり、多分船橋構成員もそうだと思いますけれども、どちらか片方ということではなくて、アクセントの置き方ということで、御発言をいただきたいというふうに思っております。それと同様に、「人材像」と「内閣府事業の意義」というのも、なかなか切り分けが難しく、今皆さんに御発言いただいた内容も、両方混ざった形で議論をしてしまっているところがあるかなと思います。そういう観点から、今、梅宮構成員の方から、「人材のコンピテンシー」というお話がございました。もし、具体的なイメージですとか、お考えがあるようでしたら、御発言いただけますでしょうか。

○梅宮構成員 まず、令和4年の検討会の報告書で、グローバル・リーダーに求められる5つの要素として挙げられた点はよくまとまった形で御提示いただいていると思っております。そこから数年の間には、いろいろな変化があったと思いますが、1つは環境問題も含めて、1国では対処できないような地球規模の課題がますます深刻化してしまっています。一方で、日本は少子化と人口減少というのがさらに進んでいます。また、世界的に見ると分断化がどんどん進んでいってしまうことを考えた時に、5つの要素の中でもますます大事になっていくコンピテンシーということであると、1つは国際的な視野を持って、異なるバックグラウンドを持つ他者と関わるような力が必要となると思われます。国際協働力という言葉で置き換えられるのかもしれませんが。それはまさに皆さんがおっしゃったような、将来、地域の安定につながるような貢献ができる人たちを育成し人的なネットワークを作っていくという目的とも関係するコンピテンシーかと思われます。

もう1つは、国際協働力とも関わりますが、コミュニケーション力、他者を思いやる力や違いを受け入れる力が養われることが期待されると思います。最後に、この点にどのように重点を置くかは御議論あるかもしれませんが、この事業において問題設定・解決力も強化されているのではないかと考えていて、この点をもっと強調しても良いのではないかなと思っております。

○南島座長 ありがとうございます。前の報告書では、「育成すべき人材像」ということで書かせていただきましたが、「コンピテンシー」ということで改めてそれを見ると、また個々人の育成すべき「能力」のところに焦点が当たるような形になるかなと思います。

いろいろと見せ方、見え方というのはあるというのを、今の御指摘から印象として受けております。ありがとうございます。他に、この段階で御発言ございますか。

○船橋構成員 トビタテでは、イニシアチブ、ダイアログ、コラボレーションを、とりわけ重要な要素と位置づけています。その前提として、多様な人が集い、複雑な社会の中で学び合うことが重要だと考えています。ここでいう多様性とは、単に人種やジェンダーといった属性に限るものではありません。たとえば、帰国者もいれば、海外経験が初めての人もいる。そうした多様な経験や背景、立場を持つ人がいたほうがよいという考えから、ダイバーシティも重視しています。そのうえで、イノベータータイプであることや、自らのビジョンやモデルを描けることも大切にしています。また、「Think Global, Act Locally」という考え方を非常に重視してきましたが、最近では、むしろ「Think Local, Act Globally」という観点から、日本の社会課題を世界に発信していこうということも伝えています。ご参考にしていただければと思います。今年のダボス会議で議論されていたのは、AI時代にこれから必要となるスキルとして①クリティカルシンキング ②リスボンサビリティ ③レジリエンスの3つが重要だという議論がありました。ここでいうリスボンサビリティとは日本語だと“責任”と訳されがちですが、Response=対応する、Ability=能力という解釈に近く、つまり状況に応じて適切に変化に対応する能力、というイメージです。加えて、AI時代だからこそ、AIでは獲得できない一次情報の土台となる失敗体験や実体験がますます重要になるとも言われています。そこから生まれるレジリエンス、すなわち失敗や困難に立ち向かう力が重要だ、という議論です。

トビタテは制度上、社会人を対象にできないという制約があります。この点は、逆に皆さんの事業にとって有利に働くのではないかと考えています。社会人を積極的に受け入れ、政治家や官僚に限定する必要はありませんが、たとえば若手の政治家や官僚が1か月間、海外の同世代の人たちとつながることには大きな意味があると思います。さらに、そうした若手の官僚や政治家がアルムナイに多く加われば、長期的にはこの事業への影響力を増す賛同者が増えていくのではないかと考えます。

率直に申し上げて、最近のアルムナイを拝見すると、そのような層はまだ少ないという印象を受けました。私の周囲には官僚や政治家が多いのですが、残念ながら海外の人脈をあまり持っていない方が少なくありません。だからこそ、こうした時代において、外交の面でさまざまな取組を進めにくい要因の一つになっているのではないかと考えています。その意味で、この「船」を単に維持するのではなく、むしろ生かし、進化・深化させていくという考え方もあるのではないのでしょうか。これも一つの活用の方向性であり、同時に、この事業を存続させるための見方としてあってよいのではないかと思います。

○南島座長 ありがとうございます。

ひとまず、先に進めて参りたいと思います。もう1つ、冒頭に統括官からも御提起ございましたけれども、今回のこの会の大きなポイントとして「船」の問題がございます。船を取り巻く環境の変化

を踏まえた事業の在り方も考えていかないといけない。むしろ、この環境の変化で、事業のPRポイントを再整理しないといけないということになっているわけですが、それが議題の3つ目ということになります。こちらは事務局から御説明をお願いしたいと思います。

○牧野参事官 船事業を取り巻く環境の変化を踏まえた事業の在り方について、事務局から説明させていただきます。冒頭にも御説明させていただきましたけれども、この論点については主に次回で議論していただきたいと思っておりますが、本日は初回の会議ですので、環境の変化の状況や論点について共有させていただきたいと思っております。まず、船事業の概要について簡単に説明させていただきます。資料の2-1です。「東南アジア青年の船」事業については、日本とASEAN各国政府の共同事業として実施されています。参加青年は全体で200名程度となっていて、日本の参加青年はそのうちの1割程度というところで、全体としてみると日本青年の割合がかなり低いというところに特色がございます。活動の内容としては、日本国内活動、あるいは船上活動、寄港地活動ということで構成されておりまして、船上では、テーマ別にコースが分かれますけれども、テーマごとに専門のファシリテーターを設けまして、社会課題に関するディスカッションを行うということになっております。寄港中における活動としては、近年はASEAN各国の2か国程度に寄港しておりまして、寄港国の政府が企画した活動を実施しています。例えば、表敬だったり、テーマに関連する施設訪問だったりということをやっております。

続いて「世界青年の船」事業です。先ほどの話にもありましたが、交流の対象国を固定していないという点に特色があると思っております。こちらも全体で200名程度の参加青年で実施しております。うち半分程度が日本人となっております。東京でのプログラムと船上での活動、国内の寄港地での地域訪問活動と地域実践活動を組み合わせた行程となっております。船上でのディスカッション活動について、専門のファシリテーターのもとで、ディスカッション活動を行うという点は、先ほどの「東南アジア青年の船」事業と共通しております。現在の「世界青年の船」事業については、ディスカッション活動の中で学んだ内容を地域の現場で課題解決に向けて実践するという点に大きな特色があると考えています。地域実践活動と呼ばれているものになります。

参考資料1にありますとおり、令和4年の検討会において、令和の新プログラムということで船事業の見直しを含めて行われ、新プログラムの特色として、船上での共同生活と実践の場を組み合わせたプログラム構成ということが検討会の方で示されております。この検討会の方向性を踏まえまして、現在「世界青年の船」事業を実施させていただいているということです。

両事業に共通することですけれども、船の中で共同生活を通じまして、他の交流方法では得難い、密度の高い交流を行ってきていると考えておりまして、冒頭説明させていただきましたけれども、各国に同窓会組織があるような、そもそも参加人数も多いですし、国内外において大規模なネットワークができてきていると考えております。

他方で、先ほど申し上げたとおり、使用船舶が運航を終了するだとか、船が大型化することによって傭船料が高騰するといった要因がありまして、これまでと同様な形で1年2事業という形で行っていくということが非常に難しい状況になってきております。

資料4-1について御説明させていただきます。今回の検討会におきましては、このような状況を踏まえまして、そもそも前提に立ち返って船を用いることにどのような意義があるのかというようなこと、あるいは、先ほど御説明させていただいた「東南アジア青年の船」事業、「世界青年の船」事業の2つ、我々としては性質が異なる事業だと思っておりますけれども、それぞれの事業で、どこがコアな要素となっていて、それをどのように維持・強化していくべきか、さらには船を使うことを前提としながら、ということもあるかもしれませんが、今後も安定的に継続的に持続させていくためには、どのような方向の見直しが考えられるかというような流れで、この船事業の在り方について検討・整理していただきたいと考えております。

それぞれについて簡単に御説明させていただきます。まず、船を用いること自体の意義について御説明させていただきたいと思っております。資料4-2で、簡単に船事業の整理をさせていただいたものを御説明させていただきます。こちらはこれまでに様々な機会で、このような検討会のようなところも含めてですが、指摘いただいたものを我々の方で整理させていただいたもので、船を用いることの意義を5点に分けて整理させていただきました。こちらの方で非日常性と書かせていただいておりますけれども、既存の日常生活、あるいは社会的な役割から離れた形で、国籍等も関係なくということかもしれませんが、そういう役割から離れたところで、相互に交流する中で、研修や交流の効果も高まると考えております。

2つ目、密室性と書かせていただいておりますが、先ほど白木会長からもお話がありましたが、船の中で協働することばかりではなく、摩擦だとか、トラブルみたいなものも含めて起きるという中で、逃げ場がないという言い方が適切かどうかということはあると思いますが、船の中のメンバーだけでなんとかそれを解決していかなければいけないという、第三者が介入できないような、そういう状況というのが船の独自性だと思っております。そういう中で人間関係の構築であったり、課題解決能力というのが高まるということがあると整理させていただいております。

3つ目、機能性ということで書かせていただいております。船は宿泊手段であると同時に移動のための手段でもあり、研修、文化交流、発表を行うような機能も備えています。プログラムを効率的、あるいは研修効果を最大化するために、そういう機能があるというのが船の特色の1つだろうと思っております。

4つ目、大規模性と書かせていただいておりますけれども、今の船、にっぽん丸ですと200名程度の参加者が一同に介して参加できるということで、12か国程度が交流国として参加して、各国から10名程度参加しています。文化的な多様性であったり、国による多様性、あるいは国の中での多様性も含めて、そういうものを一度に体験することができる、あるいははそういうネットワークを、形成することができる、多角的なネットワークを形成することができる、というのも、船の中で大人数を一度に集めているということの特色の1つと思っております。あとは、象徴性あるいは独自性。中村構成員もおっしゃっていただいたとおり、何十年も続けてきている中で、アルムナイにもいろいろな方がいて、船を用いた事業という意味では、世界で類を見ないものだと思っております。そういう中でブランド価値みたいなものが、新しい優秀な参加者を求引することに役立っているというようなことも

あると思っていますし、日本の貢献という意味での象徴的な意味もあると思っています。

以上、我々の方で整理させていただいたものですが、これに捉われることなく、船を用いることの意義について改めて御議論いただきたいと思います。

資料4-3ですけれども、それぞれの事業の概要を御説明させていただきましたが、口頭で言われてもどう比較したらいいのか分からないこともあるかと思っておりますので、ざっと簡単な特色の違いを対比するような形で整理させていただいております。これらを参考にしながら、「東南アジア青年の船」事業、あるいは「世界青年の船」事業で、中核に据えるべき価値だとか、船を用いることの意義とどのような関連性にあるのかというようなことを、議論していただくとありがたいと思っております。各事業で中核に据えるべき価値、目的みたいなのを前提にしながら、事業の内容、プログラムの在り方について、改めてどのような内容を維持・強化すべきか、といったような点を議論いただくとありがたいと思っております。

次に資料4-4ということにして、船を使用する、使用を継続する場合でも、船を使うといっても、同じやり方ばかりではないのではないかということで、どういうことが考えられるかということ整理させていただいたものになります。船の使用を継続する場合に考え得る事業実施方法を整理したものであるということで、左から並べていますが、具体的には従来通りクルーズ船を我々だけの事業で使うという意味で、フルチャーターと呼んでいますが、フルチャーターして実施する方法というのがあるということ。

他に2つ目ですが、フルで借りるのではなくて、既存のクルーズ商品というか、売られているようなものを、一部分、キャビンを買取るような形で利用するような、そういう方法もあるのではないかと書くさせていただいております。

さらにはフェリーをチャーターする方法というようなものはあるのではないかと書くさせていただいております。

また、下の方に書かせていただいておりますけれども、船をすべての期間使うというわけではなくて、これも従来一部やっているところもありますけれども、船の利用期間を見直して、航空機、あるいは陸上でのプログラムと組み合わせる方法というものもあるのではないかとことです。

また、それぞれの方法について、こういうことに留意が必要なのではないかということについて、我々で考えられるところをチェックで書いてあります。

この表ですけれども、単なるコストの削減を目的とするというよりも、各事業でどのような価値を中核に据えるのかということを考えて、それを維持しながら、どのような形で事業を持続可能にしていくことができるのかということを考えるための、論点を整理したものであるということで、お示しさせていただきます。

従来とは異なる方法を考えることによって、事業の中核となる価値がここにあった、というのが浮き彫りになるということもあると考えております。今後、第2回が主だと思いますけれども、議論においてはそれぞれの方法で、従来の価値のうち、何が維持されて何が失われてしまうのか、あるいはどのような運用の改善を行うことによってそれを和らげるようにできるのかということの評価、

整理していただければと考えております。

併せてということで、資料4、船橋構成員からもありましたが、公費以外のリソースということも一応考えられるのではないかとということで書かせていただいております。安定的な事業の実施というのを考えた場合に、税金、公費以外のリソースを活用すべきという御提案をいただくこともあります。例えば、各国政府に出してもらえばいいじゃないか、著名なOB、お金持ちのOBがいるなら、そういう人に支援してもらえばいいのではないかと、というような御提案をいただくこともありまして、本検討会におきましては、こういう点についても併せて考え方を整理していただくということをお願いできればと思っています。

また、先ほどからの人材像みたいなのところも関係しますが、船の参加青年の構成をどう考えるのか、船の構成をどうするのかによって変わってくる部分もあると思っていますけれど、船事業以外の事業との切り分けをどう考えるのか、そのような点についても、可能であれば議論して整理していただければと思っています。事務局の説明は以上になります。

○南島座長 ありがとうございます。時間を気にしていただいて、若干要約的にお話をいただいたところがありますけれども、私の方から少しだけ補足をお願いしたいと思います。資料4-2、4-3、4-4、こちらでございますが、4-2は、今までの議論と報告書とかで、検討会とかいろんなものを踏まえながら、どういう特徴があるのか、船を用いる意義としてどういうことが考えられるのか、ということ整理していただいたということですね。これはいいと思いますけれども、続きまして4-3、「東南アジア青年の船」事業、「世界青年の船」事業と二つの事業について、特徴の違いがあるとすると、これは先ほどの船の特徴で、例えば、規模が大きいのは「世界青年の船」事業というところがあると思いますが、「非日常性」だと、両方ともあると思いますが、何か特徴的な、先ほどの船の特徴と照らした時に違いがあるのかどうか、お伺いしておきたいと思います。

それから、資料4-4ですね。「クルーズ船のフルチャーター」から「外国船社のフルチャーター」まで、ここの説明はちょっと割愛していただいたので、「フルチャーター」と「ブロックチャーター」と、「フェリーチャーター」と「外国船社のチャーター」と、ここは説明いただいた方がいいと思いますので、少し補足をお願いできればと思います。

○牧野参事官 補足させていただきます。資料4-3のところ、現在の青年の船交流事業として二つ実施しているものについて並べてあって、それと船を用いることの意義ということで、関連性の整理についてということだと思います。

こちらについて、どの項目をどう評価するかというのは様々な御意見があるかと思いますが、共同生活を通じて人間関係が構築される、船の中という非日常空間で議論を行うことによって、人間関係、あるいは研修効果を高める、ということについては、現在の「東南アジア青年の船」事業、あるいは「世界青年の船」事業の両方に共通していると思っています。機能性という部分で申し上げると、お話しさせていただいたとおり、船の使い方という点で「東南アジア青年の船」事業と「世界青年の船」事業では違いがあるかと思っています。「東南アジア青年の船」事業については、まさにASEAN各国に訪問しながら、移動しながら行うという事業になります。「世界青年の船」事業について

ては今国内の航路で国内の地域に滞在しながらそれぞれの地域での活動を行うというようなことをしております。同じ船での移動ということでも、国外に出るもの、国内に留まっているものというのではちょっと違いがあると思っています。大規模性というところで申し上げますと、「東南アジア青年の船」事業につきましては、文字通り日本とASEANとの共同事業ということでして、ASEAN各国が、今ミャンマーは入っていませんが、10か国入ってきて、それに日本が入っていると。ASEAN各国は基本的にはそれぞれ同一の人数が入ってくるということで、そういう中で、一同に会してASEANの中での多様性、ASEAN同士のネットワークが日本が貢献する形で形成されていくというところに、1つの特色というか、日本の貢献というような意味もあると思っています。

「世界青年の船」事業については、さらに枠組みが、自由度が高いというか、先ほどの話でなかなか欧米以外のところに行きにくいというのはありましたが、途上国含めて色々な国が参加できるというのは、「世界青年の船」事業の特色だと思っています。それを12か国と今決めてやっておりますが、200人程度の船でやっているという中で、大規模性という部分を特色として生かしながら、多角的なネットワークの形成等につなげていると思っています。

象徴性という意味では、どちらも象徴的な意味合い、独自の意味合いが、参加者を誘引していると思います。ちょっと付け加えるとすれば、「東南アジア青年の船」事業については、基本的には同一の国でずっと50年以上やってきておりますので、そういう意味では一国あたりの蓄積みたいなものは、いろんな国が毎回変わってくる「世界青年の船」事業との違いというのはあるかなと思っています。

この上で資料4-4もちょっと追加で御説明させていただきます。こちら、先ほど御説明したとおり、クルーズ船からフルチャーターする場合、あるいは商業クルーズを利用する、通常の商業運行されているクルーズ船の一部を使うという場合。あとはフェリーをフルチャーターする場合。最後、ちょっと説明を先ほど割愛しましたが、クルーズ船でも外国の船会社が持っているような船をフルチャーターする場合ということで書かせていただいております。項目別に説明を並べておりますけれども、まず航路日程というところで、ちょっと注意が必要であるところにチェックをつけているということとして、フルチャーターの場合は基本的には自分たちが好きな時期に好きな航路を設定することができるというものになるかと思えます。

一方で、商業クルーズを利用するという場合は、既存のクルーズ商品を購入して、それを使うということで、そういう意味は日程だとか寄港地だとかというのは、我々が自由にすることはできず、既存の売られているものの中から選ぶという程度の自由度に留まるということです。細かい話で言うと、外国船籍の船についてはカボタージュ規制と言って、国内だけの運航は難しいということとして、一旦外国に行くというような、そういう意味での日程上の制約というものもあるということです。

フェリーの場合ですと、基本的にはフェリーは何かしら定期航路に周航しているのが通常だと思いますので、長期間借りられるようなフェリーということだと、ドックから出てきたばかりとか、定期航路から外れたようなフェリーというのが考えられるかなと思っていますが、なかなかそういうもので外洋まで出ていくということは難しいのかなと思っています。

外国船ですけれども、フルチャーターということで日程自体は自由に組めるというところはあるかと思えますけれども、カボタージュ規制は外国船の場合同じようにかかってくるということでして、日本国内での運航というのは難しいということを書かせていただいております。

研修設備として会議室、ホールなどについて、どういうものが船に備わっているかということで書かせていただいておりますけれども、クルーズ船で、例えば、必ずしも会議室としてあるわけではないですけれども、何かラウンジの一角を使ったりとか、そういうのも含めれば、フルチャーターの場合、ある程度大きさの船であれば、いろんな研修に使えるような設備があるだろうということで、特にそこは問題ないかと思えます。

商業クルーズの場合ですと、どうしても他のお客さんが乗っていて、他のお客さんのためにサービスを提供する必要があるということでして、利用可能な時間帯に制限がかかってくるということです。例えば、夜にステージを使ったイベントがしたいと思ったとしても、他のショーなんかをやっていたりすると難しいということでして、限られた時間の中で、どういうふうに工夫できるかというような話になってくるかと思っています。

フェリーについては、基本的には長期間、人が中に住むというようなものではないというふうに思っていますので、研修に使用できるような設備というのは限られているというのが実態と思っています。

密室性ですけれども、こちらはフルチャーター、フェリーでもクルーズ船でも、そういう意味では他のお客さんは乗ってこないという意味で密室というのは確保されていると思えますが、商業クルーズの場合は他のお客さんと一緒に乗るということで、日常空間とは違うという意味での非日常性はあるかと思えますが、他のお客さんが乗っていることを前提にして考えなければいけないというところで、密室性が薄まる部分はあるかなというふうに思っています。

費用の部分については、どういう船を念頭に置かによっても変わってきますが、我々で認識している限りでは、現在の日本の船会社が持っているクルーズ船を考えると、年に2事業を実施するのは非常に難しいということです。今のプログラムのやり方だと難しいということで、書かせていただいております。クルーズ船、外国船社のクルーズ船についても、基本的には日本の船より大幅に安い船というのは、そんなにないのかなと思っています。合わせて、外国から船を日本で使うために持ってくるための期間についての、備船期間が別途かかってくるということで、追加的に費用が必要になってくる可能性があるということを書かせていただいております。

最後、この表の備考というところで、実現可能性・リスク面での評価等ということで、いずれも利用可能な船舶というのが必ずしも多くないというのを前提にしているものですが、商業クルーズの場合だと商品というのが1年前とか2年前とかから市販されていますので、事業者との調整が必要になってくる部分があるのではないかということをチェックで書いています。他方で、船を丸ごと使うわけではないので、固定的に何人まで設定しなければ空き室がいっぱいになるということはないので、参加する人数を柔軟に設定することができるというメリットはあるのかなということで書いています。

フェリーの方についても、長期間借りるという場合には、定期航路を外れたようなものになってくるということでして、使える船はそんなにないだろうというのが我々の考えです。

同時に、ハラル対応みたいなサービス内容が外国人の方にも対応できるようなものになっているかといわれると、サービスの程度というのは、クルーズ船と比べると難がある可能性があると考えています。

クルーズ船のフルチャーター、外国船の場合ですけれども、どのクルーズ船がどこでクルーズするかというのは何年も前から決まっているということで、数年先のことについて、外国の船会社と調整を行う必要があります。他方、日本の予算は単年度での契約を前提としているということで、2年先に使いたいというような調整を外国の事業者と行っていくというのは、難しい可能性が高いと考えています。あとは、長期にわたる部分、何年も先の話での外国為替の影響や石油高の影響、将来の話の調整というところで、影響を受けてくる可能性という点での難しさもあるかなと思っています。

実現方法について、さらに飛行機だとかホテルだとか、陸上でのプログラムを組み合わせるということを下の方に書かせていただいておりますけれども、特にフルチャーターと比べると同じ期間事業を行うにしても、陸上での事業の部分が増えてくると、その分の事業費を抑制することができるということをメリットとして書かせていただいております。

あわせて、船だけだとどうしても行けないような、内陸の国などにも、飛行機であれば行くことができる、そういう可能性もあるのかなということを書いています。デメリットということで書いておりますが、船の機能性という面で御説明させていただいたように、船は移動機関でもあり宿泊機関でもあるということでして、それが航空機での移動となると、交通手段と宿泊施設を別途手配していく必要がある。地域によってはホテル、航空便のキャパシティみたいなところで、訪問しにくいというようなこともある可能性があるということを書いています。

最後ですが、安全確保等の負担が増大する可能性があるということで、基本的には船に乗っている間、船の中でのトラブルみたいなものを対応すれば良いということでしたが、それを航空機での移動、前後にバスでホテルへの移動も入ってくるということで、移動する機会が増えてくると、青年たちの安全確保等にかかる負担というのは、事務運営の観点では、増えてくるということはあるかなということでした。

以上を全体としてまとめさせていただいたのが、この資料4となります。以上です。

○南島座長 ありがとうございます。簡単にまとめますと、最初に統括官から御案内ありましたが、にっぽん丸が引退をされる。それを前提としまして「じゃあ船をどうしようか」ということになりますと、結構高い船になってしまうという問題がありまして、それ以外の方法も含めて、並べていただいたのが、今共有していただいた資料4-4、4つの選択肢ということになります。

他方で、これは今の予算規模を前提とした議論ですので、それ以外の、例えばトビタテのような方式で、そういう手法も取り得るのかというところを議論していかないといけない。この4つです。にっぽん丸の引退と、4つの選択肢の検討と、他の方法の検討と、この3段階ぐらいの議論がここには含まれていると、こういうふうに御理解いただくといいと思います。本論点に関する議論は、本格的

には次回に議論させていただきたいと思えますけれども、今の時点で、何か御質問等、確認されたいことがありましたら、御発言をお願いしたいと思えますが、いかがでしょうか。

○中村構成員 につぼん丸が引退して、クルーズ船が大型化されているということなので、クルーズ船をチャーターするとしても、規模的にもっと大人数、今までの数だとちょっと余ってしまうような状況になると想像し、それで思ったのですけれど、私は第9回の参加者で、定年退職を迎えたぐらいなので、もう定年退職を迎えたOB・OGがASEAN各国、日本も含めて居ると思えます。実は年配者にクルージングは非常に人気があって、私の友人が国連を定年退職した後、ピースボートに乗船して3か月旅行してきたと聞いてびびったのですが、例えばチャーターして、一般客ではなくて、一部を、船会社のビジネスとして、OB・OGや関係者向けにパッケージとして売り出させていただくというようなことは可能ではないかなとちょっと思ったりして、もしそういうのがあったら自分は乗りたいなと、単純に思いました。

そうすることによって何が可能かという、例えば、強化する面としてはコラボレーションとか、いろんな方々の連携ということ考えた時に、OB・OGとの連携は一般社会の中に散らばってしまうと難しいのですが、少なくとも船に乗っている間であれば、うまくそういったことを組み合わせていただくことによって、若い頃に共通体験したOB・OGと今の参加青年がディスカッションするような時間を設けていただいたり、あるいは、もちろん船のビジネスとして一般客用には、それなりのクルーズ船としてのサービスを提供していただいたりというようなことが、船会社としてビジネスになるという視点から、検討してもらえないのかなということをおもいました。そういうのがあったら参加したいです。

あと船上同窓会のような形で、それこそ私の参加した第9回とか第23回とか仲間同士で呼びかけて、みんなで参加しちゃおうみたいなことも起きそうな気がして、そういうことを試してやっていくうちに、OB・OGを生かした良いプログラムに発展していくのではないかと、少なくとも、「東南アジア青年の船」事業については思いました。

「世界青年の船」事業はもし、国内だけで回すのであれば、国内船なので外洋航路に行かなくてすむというやり方もあるし、もし、「東南アジア青年の船」事業でそういったやり方がうまくいきそうだったら、「世界青年の船」事業の方も、70代80代の前半ぐらいまでだったら乗ってみたい。普通の商業クルージングに乗るより乗りたいと単純に個人的に思ったので、コメントさせていただきました。

○南島座長 ありがとうございます。中村構成員、今の御発言は大変興味深いですが、OB・OGで、例えば、一つのプランが200万とか300万とか、そういうお金を払ってでも参加をして、プログラムは共有すると、こういう御提案をいただいたという理解でよろしかったでしょうか。

○中村構成員 全部ではないと思えます。クルージングの期間だけとか、例えば、行った先で降りちゃうとか、全部のプログラムの期間参加する必要は全然ないと思えます。私もディスカッションアドバイザーで乗らせていただいた時に、最初の寄港地に着くまで乗って、あとは飛行機で帰ってきたというようなこともありましたので、もうちょっと工夫したような形で。ただそういうふうに払うことによって船の部分がだいぶ助かるのではないかと。でも、数百万円だったら払っちゃう人もいるのでは

ないか。ある年齢以上になったら、貴重な体験するために、払っちゃう人って結構いるのではないかなと思います。

○南島座長 ありがとうございます。今の御発言に、白木会長と船橋構成員が反応されていますので、それぞれ御発言いただきましょうか。よろしくお願ひします。

○白木オブザーバー OB会としては、船を乗るタイミング、もしくは、内閣府事業に参加するタイミングでは、青年たちにそんなに差はないですが、実は「東南アジア青年の船」事業に乗った青年たちは、きちっと「東南アジア青年の船」事業のOB・OGになって帰ってくるとか、事業によっても与える影響が違うなど、プログラムの立て付けで変わると思っています。

例えば、「東南アジア青年の船」事業だと、日本青年は今20名、昔は30名だったというふうに記憶していますが、各国青年との数がほぼ同数です。そうすると、例えば10か国プラス日本の11か国が、それぞれの数、同数できちんとアジアを考えていこうという気運は、かなり醸成されると考えていますし、かえって「世界青年の船」事業の方は、たくさん日本青年がいるからこそ、日本の青年の中の多様性や多様性を生かしたチーム、日本としてどういうふうに世界の皆さんと交流をしていこうかみたいなことだとか、より各国の文化圏の対立や摩擦も超えて、色んな問題が起きやすいのも思った世界船だというふうには思っています、ある意味一体感を持って、国の代表としてやっていく「東南アジア青年の船」事業の参加青年のOBや、ある世界のダイバーシティを一身に受けて、世界は一つにもなりたいたいけれど、いろんな問題を抱えているということがものすごく体感できる世界青年の船のような、構成国や、どういうふうな人数比率であるかなどについても、参加青年をどういうふうに育てていきたいか、どんなポートフォリオで人材像を組むといいのかということについては、プログラムの内容と性質、事後の活動や組織を作っていくときに戦略的に影響を与えたいと思います。

中村構成員の案も、船は非常に人気がありまして、につぼん丸のさよならクルーズに来た時は1日でチケットがすぐいっぱいになったりというところでいくと、船にもう一回集まって、世界のことを、改めてそれぞれの専門性とか立場があるからこそ議論や、交流の第二ステージみたいなものを、一部参加者の負担で実施するというのは、大いに可能性はあるかなと思ひ、ワクワクした次第でございます。

○南島座長 船橋構成員、御発言をいただいてもよろしいでしょうか。

○船橋構成員 論点は大きく分けて二つあると思ひます。一つは船をどうするか、もう一つは費用をどうするかです。

船については、私はそれほど詳しくないのですが、十分に時間をかけて検討したほうがよいと思ひます。費用面も含めてですが、私であれば、世界中のアルムナイに対して「船を探してほしい！」強く呼びかけると思ひます。そうしなければ事業そのものがなくなってしまうと。とにかく必死に船を探して欲しい！！と懇願するくらいのことを、本来はやった方がよいのではないかなと思ひます。

費用面についても、たとえば全額を税金で賄うのではなく、寄附を集めるという方法もあると思ひます。現在のような円安の状況を踏まえれば、海外の関係者に一定の負担をお願いすることも考えられますし、特に海外の方々には、比較的協力を得やすいのではないかなと思ひます。例えば、アルムナ

イが1万人いて、年間10万円ずつ拠出すれば、それだけで10億円になります。もちろん、一人あたり年間10万円は決して小さい金額ではありませんが、その一方で、100万円、1000万円、あるいは1億円を出せる方もいるはずです。トビタテでは2020年で終了するという話が出た際に「それはまずい」ということで、OB・OGが1000人以上寄附を行いました。寄付者の人数は重みでそれが継続につながったこ要因のひとつでもあったはずです。実際、トビタテのアルムナイの中には、32歳、33歳で数千万円単位の寄附をするような人も出始めています。そう考えると、年間15億円という金額も、決して不可能な規模ではないように思います。中村構成員の御意見は、とても良いと感じました。可能性の一つとして、トビタテには寄附に対する税制優遇措置があります。たとえば、内閣府に仕組みを整えていただくなどして寄附に優遇措置がつくようになれば、例えば「ご自身の乗船費用のうち寄附額3割でこれから参加する若者のために使われます」といった打ち出し方もできるかもしれません。さらに言えば、遺贈寄附のような考え方もあり得るのではないかと思います。年配の関係者・アルムナイが多いのであれば、自分を育ててくれた事業や仕組みに対して、生前あるいは遺産を通じて資金を託していただく、という発想もあってよいのではないのでしょうか。本当に知恵の出どころだと思いますが、特に中村構成員の案は、ビジネスモデルとしても成り立ち得る、非常に良い提案だと思いました。

○南島座長 ありがとうございます。時間的には閉会の時間になっておりますが、梅宮構成員御発言ございますか。

○梅宮構成員 皆さんおっしゃったことに賛同するところです。特にOB・OGの寄附は可能性を検討するに値するのではないのでしょうか。OB・OGにはまさに各界のリーダーになられている方も多くおられるので、そういう方に御相談を進めていくというのは意味があるかと思います。

山本構成員がおっしゃった参加費に関しても、いろいろ難しい議論はあると思いますが、私も是非検討できるといいと思います。参加費を設定することで経済的な理由で参加できない人たちが出てくることを避けるために、例えば、奨学金を別途用意して、クライテリアを設けて提供をするということも併せて考えていくことができればと思います。

○南島座長 ありがとうございます。平等ではなくて、何らかのクライテリアを設けて差をつけていくということも選択肢に入るということですね。ありがとうございます。議題3は次回また改めて、議論していただこうと思っております。アイデアがありましたら、また整理をいただきまして、次回の検討会で御発言をお願いしたいと思います。時間ですので、ここで本日の議論としては終了とさせていただきます。最後に事務局から連絡事項等あればお願いします。

○野木参事官補佐 事務局より2点御連絡いたします。まず本日の会議資料については、内閣府ウェブサイトにて公表いたします。議事録については後日各構成員及びオブザーバーの皆様の御確認を経て、内閣府ウェブサイトにて公表いたします。また、次回の検討会については5月22日（金）の10時から開催予定です。詳細については、また個別に連絡させていただければと存じます。事務局からは以上です。

○南島座長 本日は大変活発に御議論いただきまして、誠にありがとうございました。本日の検討会は以上とさせていただきます。ありがとうございました。